



尻別川の未来を考える オビラメの会

OBIRAME RESTORATION GROUP
NEWSLETTER Nov. 2022

57

坂田潤一・撮影

イトウ稚魚1645尾を再導入 尻別川上流域・喜茂別町と京極町の2支流に

絶 滅危惧種イトウ尻別川個体群の復元を目指すオビラメの会は、9月28日と同30日、いずれも尻別川上流域に位置する喜茂別町と京極町各1本ずつの支流に、尻別川個体群固有の遺伝子を引き継ぐ人工孵化イトウ（当歳）計1645尾を再導入しました。両支流への放流は2年連続2度目です。

放流魚は今年5月、有島ポンドの飼育親魚たちから人工

採卵・授精で誕生したイトウたち。孵化から3カ月ほど経過し、尾叉長4～5cmに成長したタイミングでの放流です。放流した後も追跡して識別できるように、すべての個体のアブラビレをカットしてあります。

放流には、オビラメの会会員らのほか、地元・喜茂別小学校の児童たちや京極小学校関係者も参加し、稚魚たちの自然復帰を見送りました（→p4）。

尻別川上流エリアへのイトウ(当歳)再導入実績
再導入イトウの定着を図るため、今季の放流河川名を地元以外には公表していません。ご了承ください。

| 放流日 | 河川名(自治体) | 尾数 | 標識(カット部位) |
|------------|----------|------|-----------|
| 2020/09/26 | C川(喜茂別町) | 1814 | アブラビレ |
| 2021/09/26 | A川(喜茂別町) | 1650 | |
| | C川(喜茂別町) | 1650 | |
| 2021/09/28 | B川(京極町) | 1100 | |
| 2022/09/28 | A川(喜茂別町) | 845 | |
| 2022/09/30 | B川(京極町) | 800 | |

尻別川唯一の「天然イトウ」繁殖地はいま

川村洋司／大石剛司 オビラメの会

最優先で保護すべき繁殖地

オビラメの会の「見まもり隊」は、毎年
の雪解け時期に、倶知安町内の尻別
イトウの自然繁殖地を24時間体制で見
守っています。現在確認されている唯一
の「尻別イトウ天然魚の自然繁殖地」で
あり、オビラメの会是最優先でこの場
所の保護に取り組むことを決め、地元・
倶知安町のみなさんのご理解とご協力
を得て、2011年から今年（2022年）ま
で11年間、繁殖期間中のパトロールと、
イトウを見学に訪問くださる人たちへの
情報発信を行なってきました。

見まもりエリアは600m 区間

この川でイトウたちが主に産卵してい
るのは、現在はせいぜい600mほどの区
間です。われわれの見まもり活動もこの
区間が主舞台です。ときおりこの区間を
越えてさらに上流にのぼっていく親魚も
いますが、そちらについては後ほど触れ
ることにして、まずこの区間の状況をご
説明します。

われわれは毎年、河川管理者（北海道
／倶知安町）の許可を得て、イトウ繁殖
を知らせる看板を立て、見学者の安全確
保と、人が川に近づきすぎて親魚を驚か
さない対策を兼ねて、兩岸の堤防に沿っ
てガイドロープを張っています。時々、

釣り人も現れますが、見まもり活動連続
10年を越えた昨年（2021年）から、オ
ビラメの会がこの時期この区間の河川敷
（堤外）の占有許可を河川管理者から得
られるようになったので、「イトウ保護
のために釣りは自粛ください」と、かな
り言い易くなりました。

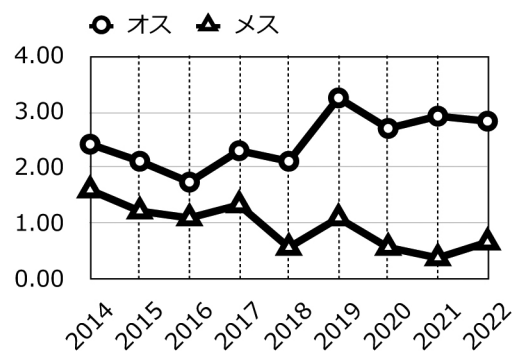
見まもり隊は当番制で、朝5時半から
夕方5時半まで、2時間おきに1日に
7回ずつ、堤防道路を巡回しながら川を
観察するほか、天候・気温・水温・水量・
水の色などをモニターしています。水中
にイトウがいるのを見つけるたび、
魚を脅かさない距離から写真や動画
を撮影して、時刻と位置を地図
上にポイントし、尾数やオスメス
判定、行動の様子などを「オビラ
メ日誌」に記録する、という手順
です。その間に、見学者への説明や、
余裕があればイトウの見える位置
まで案内して、堤防上から一緒に
観察することもあります。

2022年シーズンの繁殖状況

2022年の最初の^{そじょう}遡上確認は4月21
日午前9時54分で、この個体はオスで
した。メスの初確認は4月30日で、オ
スとメスが並んで、産卵行動が見られま
した。この時期のイトウのオスは、真っ
赤な^{こんいんしよく}婚姻色（繁殖期の性成熟個体に特有

の体表の色や模様）が出て見つけやすい
のですが、メスは婚姻色がほとんど出な
いため、水上からはなかなか発見できま
せん。われわれのイトウ目視カウントも、
派手な姿のオスの数はかなり正確と思
いますが、地味な色のメスは見落として
いる割合が高いと考えられます。

そのバイアスをできるだけ除くため
に、その年の最初の親魚確認日から最終
確認日までを「遡上期間」とみなして、
観察数（延べ数）を遡上期間（日）で割
り算したのが、このグラフです。



まずオスの動向を見ると、2016年ご
ろに少し数値が落ちた後は、増加傾向が
続いています。いっぽうメスは、かつて
1.5尾／日ほどだったのが、最近はおよ
そ0.5尾／日と、著しく減少しています。

今度はメスの産卵行動の観察回数に注
目してみましょう。普通、1度の産卵期
に、小さなサイズのメスだと3回くらい、
大きなサイズだと6回くらいに分けて

「見まもり隊報告会」主催者ごあいさつ

倶知安町長 文字一志

本日は、このようにたくさんのみなさまにお集まりいただき、
御礼を申し上げます。あわせて、主催者の尻別川の未来を考
えるオビラメの会におかれては、毎年5月の遡上産卵時期を
含め、長年のイトウ保全活動にご尽力されていることに、改
めて深く敬意を表します。ありがとうございます。
この会場には喜茂別町の内村俊二町長もお越しくださってい

るのですが、^{ようていさんろく}羊蹄山麓の各町村は、尻別川統一条例をつくっ
ております。倶知安町においては「倶知安町の河川環境の保
全に関する条例」という名称ですが、その17条には「日本最
大の淡水魚であるイトウをはじめとする希少な生物に対する
保護について特に配慮するものとする」と明記してあります
（→p8）。現状では、保全活動はオビラメの会のみなさまのご
努力によるところが非常に大きいわけですけれども、私ども
としても、この条例の趣旨を十分に踏まえて、今後ともオビ

産卵をします。今シーズンは、サイズの異なる2尾のメスを目視しましたので、少なくとも2尾以上のメスがこの区間に遡上してきていたのは確実です。メスの確認初日(4月30日)から最終日(5月8日)までは9日間でした。個々のメスの滞在期間はせいぜい3~5日程度ですから、この9日間に3尾くらいのメスが遡上してきていた可能性もあると思います。もしこれらのメスがふつうに産卵していたら、産卵行動の観察数も10回は越えていたでしょう。でも実際には今年の遡上期間中の観察回数は、わずか6回でした。

最近4年間の観察記録を集計してみると、見まもり隊がモニターしている約600mの区間のうち、メスたちの産卵ポイントにはほぼ3カ所に限られていることが分かりました。これら3ポイントのうち、最上流と最下流のポイントの距離は約400mです。「400m区間に産卵場所が3カ所」という状態は、イトウにとっては、まあ普通のことです。逆に考えると、われわれが2011年から「見まもり」を続けてきたこの600m区間では、たとえこれ以上たくさんのイトウ親魚たちが遡上してきたとしても、もう産卵できる場所がない、ということかもしれません。

順調な世代交代を裏づけ

今後の期待がふくらむような変化もあります。「見まもり」区間には落差工(堰堤)が1基あり、われわれが見まもり活動を開始した12年前にはその前後に1mほどの落差が生じて、明らかにイ

トウの遡上を邪魔していましたが、その後、堰の直下に自然に砂利が溜まり始め、現在ではほとんど落差のないフラットな状態に変わりました。最初に述べたように、いまではわれわれの見まもり区間からさらに上流へと遡上していく親魚たちもいます。今年、落差工の上流200mほどの位置(見まもり区間外)でイトウが産卵しているのを確認しました。「600mの見まもり区間でメスの観察尾数が減っている」とお話ししましたが、繁殖環境の上流方面への拡大がその一因なのかもしれません。

また、今季初めて、比較的小型(推定尾又長70cm)のメス親魚の産卵が観察できたのも、明るいきざしだと思えます。ここ数シーズンは、比較的尺寸が小さくて若い親魚と考えられる個体の遡上が、オス・メスともに観察されています。この支流では、2010年におよそ20年ぶりにイトウの自然繁殖が再発見されたわけですが、そのころに誕生した次世代のイトウがいま、親魚になって母川(生まれ故郷の川に戻って繁殖行動に参加すること)していると考えられます。

これまで12年間の「見まもり」活動で得られたデータを眺めてみると、オス親魚の観察数は増加傾向にあり、ここ数年は比較的小型で若い親魚の観察数が増えてきた、と言えると思います。メス親魚の観察数は低い水準のまま推移していますが、少なくともこの12年間、この支流のこの区間で途切れることなくイトウの自然繁殖が続いていることを確認できました。

イトウの世代時間は約10年です。こ

の支流での2017年以降の親魚確認数の変化は、イトウの世代交代と深く関係していると思います。この川で生まれた子どもが順調に育って、またこの川に戻って卵を産んでいるのは間違いのないでしょう。この間、意図せず落差工が自然に埋まって遡上障害がほぼなくなる、といった状況の変化が起きて、われわれの観察していない上流域で繁殖が成功し始めている可能性もあります。

尻別川の「原種」保全にむけて

この支流は、尻別イトウにとって唯一の天然魚の自然繁殖地です。いわば「原種」として、今後もずっと守っていかねければならない、とわれわれは考えています。地元のみなさん、そして行政機関のみなさんと力を合わせて、今後も長く見守っていく必要があると思います。

倶知安町内にはもう1カ所、オビラメの会による再導入イトウが自然産卵をしている倶登山川くどうせんがわもあります。われわれの放流イトウに由来する倶登山川生まれの稚魚がいま親魚になって同じ倶登山川に戻ってきて、自力で世代交代を始めているのです(2019年春に初確認)。

われわれの目標は、こうした繁殖河川を尻別川の流域全体に再生して、イトウの資源を復活させることです。ぜひみなさんのご理解とご協力をお願いします。

2022年7月9日(土曜)、倶知安町文化福祉センターで開催した「イトウ繁殖地見まもり隊報告会」から。

ラメの会のみなさまからも方策についてさまざまなご提言をいただきながら、できる限りのことをして、イトウの保全に向けて一緒になって考えていきます。

オビラメの会会長 吉岡俊彦

オビラメの会の吉岡でございます。本日はお忙しい中、オビラメの会の見まもり活動報告会にお集まりいただき、まことにありがとうございます。さきほどらい、報告がありました

ように、オビラメの会の尻別イトウ復活30年計画の活動も、もう早くも22年が過ぎようとしています。その間、倶知安町、また尻別川流域の方々、そのほか多くの方々のご協力をいただき、いままでの見まもり活動の成果が、徐々にではありますがありますが、結果として見えてまいりました。今後も会員一同、尻別川のイトウ復活の目標達成に向けて活動してまいります。今後ともみなさまがたのご協力のほど、よろしく願い申し上げます。本日はありがとうございました。

川とイトウと子どもたち

続・喜茂別小学校3年生がイトウと尻別川を学んだ 梅田 滋

きもべつ歴史プロジェクトの会KHP、オビラメの会会員

4月に初めてオビラメの会の指導で「イトウ」のことを教室で学んだ喜茂別きもべつ小学校の3年生は、5月9日、自然産卵のため倶知安そじょうの川に遡上してくるイトウの見守り活動をしていたオビラメの会を現場に訪ね、幸運にも自分の目で3匹の真っ赤な婚姻色に染まったオスを発見しました。この時のイトウとの出会いが、彼らの1年間の学習活動の原点となったのです。

「そして、9月、ぼくたちは、卵から生まれ3～4cmに育ったイトウを見せてもらいました。育った稚魚を、喜茂別川に放流しました」（3年生の学芸会発表から）

10月6日、喜茂別小学校学芸会の最終リハーサル児童公開日に招かれたオビラメの会会員の前で、3年生は、この1年かけて学んだ「イトウと尻別川」について発表しました。その2部構成の後半で発表されたのは、稚魚放流ちぎょを体験した子どもたちのみずみずしい感動のほとばしりでした。

9月28日、近くの川での稚魚放流に参加した3年生の生徒と先生は、初めてイトウの稚魚と出会いました。この日は、NHKと北海道新聞の取材班も現場に入りました。オビラメの会かわむらひろしの川村洋司事務局長から説明を受けた後、会員数名のサポートで、今年は例年より数が少ない稚魚800匹を子どもたち一人一人が手に持った小さな容器に移し、川の中でいたわるようにそっと優しく水中に放しました。さっと川の中に泳ぎ出す稚魚、戸惑うように川の中でじっとしている稚魚、川の中に立っている子どもの足の周りでじゃれあっているような稚魚。そして、そんな稚魚を観察しながら、容器の中にまたそっと稚魚をすくい両手で抱き抱えるように見つめている子どもたち。そんな光景が、どのくらいの時間続いたのだろう。各自が3度ほどそのような放流を繰り返しながら、子どもたちはその場で稚魚とすっかり仲良くなったようでした。川に入ることで自分が減多にない現代の子どもたちは、川に入ることでそのものが楽しくて仕方ないようです。そんな川の初体験を、初めて川に入った稚魚と一緒に味わい、一緒に楽しみ、そしておそ

らく、この先に対する不安も共有しているかのようでした。

「稚魚は可愛くて、放流するのが楽しかったです。でも、少し心配でした。大きな魚に食べられそうだからです」
「稚魚がとても可愛くて、放流するのがさみしかったです。この稚魚が7年後には1メートルになるなんて、信じられません。元気にこの川に帰ってきて欲しいです」
「稚魚は、小さくて綺麗でした。オビラメの会は、イトウ復活30年計画を成功させてほしいです。イトウが住める川を増やしたいと思います。ぼくもこれから、イトウを守り絶滅させない自然を作りたいです」(同)

そんな様々な想いをそれぞれが感じた、稚魚の放流でした。

「このように、ぼくたちはクイズを作ったり、学んだことを双六にしたりしました。オビラメの会のおかげで、イトウのことがよくわかりました」(同)

子どもたちが、オビラメの会からの学びをもとに、自分たちでその成果を形にしたのは、クイズや双六だけではありませんでした。オスとメスそれぞれの絵を描いてイトウの保護を訴えるミニポスターを作ったり、新聞紙を丸めて形を作り白い紙を貼って着色するなどして1メートルを超えるイトウの模型も作ってしまいました。

そして最後には、それらの全てをミュージカルのような劇にまとめ、学芸会で発表したのです。

1年間の学習の経過を紹介しながら、そして最後に、圧巻の作品(下)が披露されました。

「大きなイトウさん」という歌でした。「大きな古時計」のメロディに子どもたちみんなで作った歌詞を載せて、1

年間の想いを真っ直ぐに発した伸びやかな歌声が、会場に響き渡りました。その響きは、発表会場を超えて、稚魚が泳いでいる尻別川の支流の風となって飛んでいくようでした。

彼らのこの歌は、何度聴いても胸に込み上げてくるものがあります。

この歌の間奏と終奏で、子どもたちは、学習成果を次のようなメッセージに託して、発表を終えました。

「イトウを育てている池が、ニセコにあるそうです。そこでは、採卵と言ってメスのお腹から卵を採っているそうです。来年、見に行きたいです。」

「ぼくたちは、イトウのためにできることを増やしています。ぼくは、絶対川を汚しません。」

「ぼくは、大人になったらオビラメの会への協力を頑張ります。皆さんも、川を汚さないよう協力してください」

「(全員)協力してください!!!」(同)

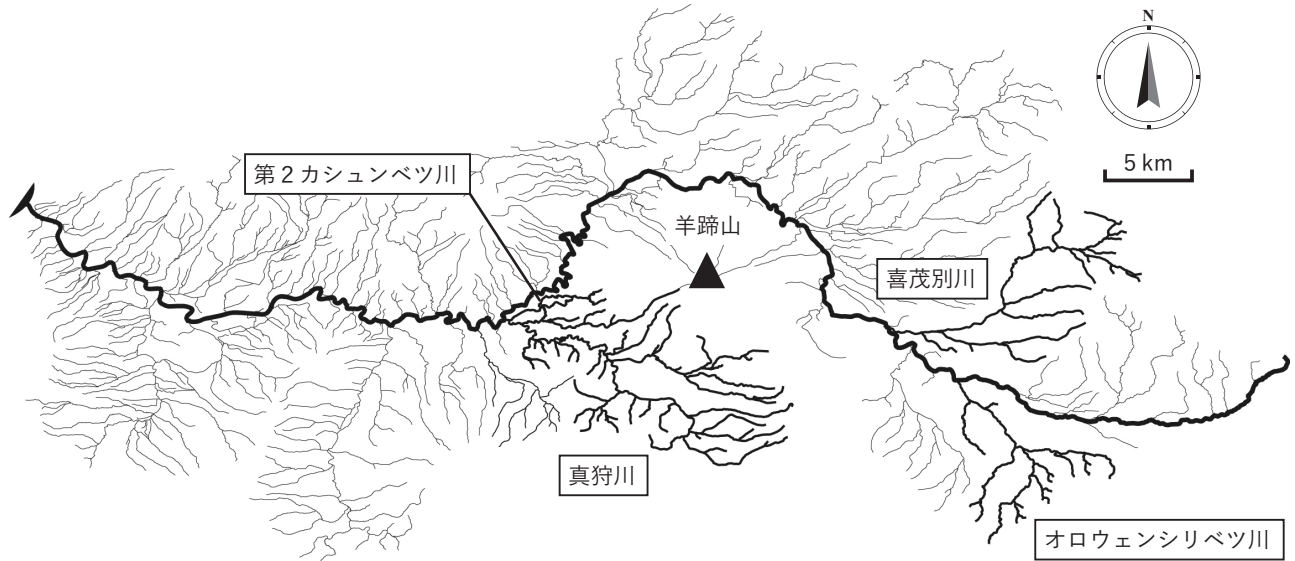
4月の教室での授業から始まり、10月の学芸会でその成果が発表されるまで、子どもたちは、オビラメの会とすっかり仲良くなっていました。

11月1日から6日にかけて、「きもべつ歴史プロジェクトの会KH P」の文化祭展示室に、この1年間の成果の一部を学校からお借りして展示しました。会場を訪れた3年生の一人は、会場内を見回して「イデさんは？」と私に聞きました。井手道雄さんは、出前授業で何度も習った「イトウの先生」の一人です。「今日は井出さんは来ていないんだよ。ぼくもオビラメの会の一人なんだけどな……」と小さな声で答えました。でも、彼はとてもがっかりしたようでした。

大きなノッポのイトウさん
オビラメともいうよ
きれいな川に住んでいる
幻の魚さ
ぼくたちは三匹見つけたよ
メスを待っていたよ
今でも覚えている、赤い赤いオスを
跳ねたり隠れたり、
チャプチャプチャプチャプ
オスはメスを待ってる待ってる
今でも覚えている赤い赤いオスを
大きなノッポのイトウさん
春に卵を産むよ
きれいな川に住んでいる
みんなのヒーローさ
みなさんにお願ひがあります
ポイ捨てをしちゃダメ
緑を大切に
イトウさんのために
(喜茂別小3年生の学芸会発表から)

発表の様子を動画サイト「オビラメチャンネル」でご覧いただけます。<https://youtu.be/FaxbbyL8yQE>

リゾート開発・河川工事をめぐって



尻別川工事計画に関する協議会を開催

尻別川河川管理者の北海道^{シリベシ}総合振興局建設管理部と「オビラメの会」の協議会が6月3日午後、喜茂別町^{まもべつちょう}農村環境改善センターで開かれました。3月12日に続く開催。前回の協議でオビラメの会側から再検討を求めた工事計画について、振興局の対応策の説明を受け、議論を交わしました。まもべつ歴史プロジェクトの会KHP（齊藤久会長）と、喜茂別町建設課、同町教育委員会も参加しました。

(1) オロウエンシリベツ川合流点護岸工事計画

振興局から「はじめ準備していた従来工法を改め、隙間のある法面ブロックに覆土する手法^{ふくど}に変更し、早期の植生回復を図ることにします。また、今季の着工は見送って、来年（2022年）9月以降に実施することにしたい」との修正案が示されました。オビラメの会からは「景観配慮型の工事に変えたことは評価するが、加えて、魚類に対する配慮も願いたい。工事後の変化をモニターしながら対応してほしい」「今後も協議を続けながら、振興局もオビラメの会や喜茂別町と一緒にイトウ復元に貢献した、といえるような形を」といった意見を伝えました。

(2) 喜茂別川の河畔林伐採工事計画

振興局から「この計画は今季は中止します」と説明がありました。イトウ再導入ポイントでしたが、当面の心配はなくなりました。「喜茂別小学校が今年からイトウ学習を始めるなど、町内でイトウ復元への関心が高まっている。

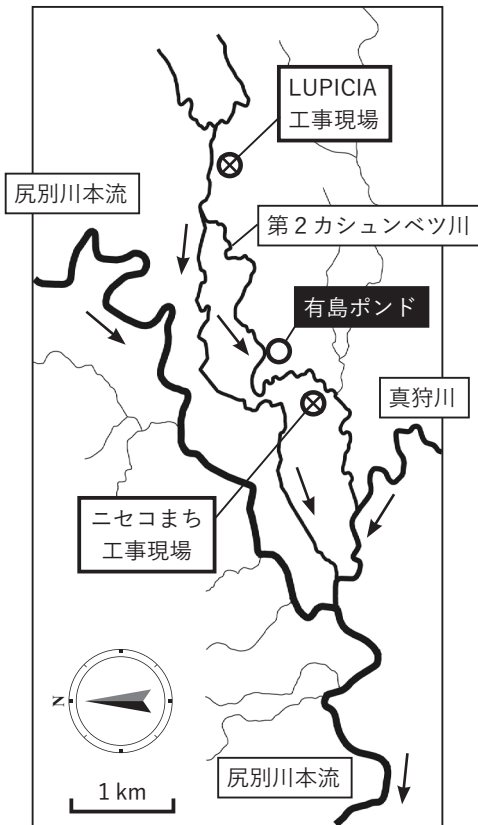
お互いに理解を深めながら工事範囲を決めてもらえたら安心」といった要望に、振興局側から「分かりました」の答えがありました。

(3) 2024年・真狩川^{まっかりがわ}改修計画の情報提供

振興局から新計画の概要が示されました。工事範囲は約10kmの未改修区間です。吉岡俊彦会長は「真狩村からニセコ町まで、全区間で工事するんですか？」と質問し、「洪水被害の出た場所を部分的に工事するというならともかく、何十カ所もとなればたいへんな工事になる。真狩川は非常にいい溪相の川。昔はイトウもいたろうし、いまはオシヨロコマの川として有名で、大事に保護している人たちもいる」と、懸念を述べました。また「喜茂別川のオシヨロコマは遺伝的固有性が高いとされている。近年は生息数が減少しているようだ」「支流チライベツ（アイヌ語でイトウ・川の意）川の地名に現れているように、もともとイトウがたくさんいた川だと思う。上流域はすでに工事による環境変化がひどいが、未改修の下流域には魚類の生息環境が比較的維持されている。最大限の配慮が必要」といった意見が出ました。



平田剛士・撮影



「ニセコまち」建設工事現場(上)と「LUPICIAニセコヴィレッジ」建設地の土砂貯留施設(下)を視察するオピラメの会員ら。撮影・平田剛士

リゾート施設の建設現場を視察

オピラメの会は10月1日、「有島ポンド」にほど近いニセコ町内の開発工事現場2カ所を視察しました。尻別川水系第2カシュンベツ川から取水しているポンドを挟んで、同川下流のそばに造成中の「ニセコまち」と、上流域丘陵部の森を開いて建設が進む「LUPICIA ニセコヴィレッジ」です。各事業者に対しては計画当初から、環境保護策などについて当会の意見を伝えてきましたが、今回初めて、当会から両事業者に申し入れて、工事現場の視察が実現しました。

8月の大雨のさい、ポンドがひどく濁って飼育中のイトウにも被害が及びましたが、「上流に位置するLUPICIAの工事現場からの濁水が主因では？」との疑いが浮上。この

日は、同工事エリア内で河川屈曲部に接した「ビオトープ・第1土砂貯留施設」を視察し、問題点を指摘したところ、工事責任者から「水門を閉めるべきだった。土砂や濁り水が出ていたと思う。再発防止に努めたい」との言葉がありました。当会からは「大雨の予報が出たらあらかじめリスクを知らせてほしい」と要望しました。

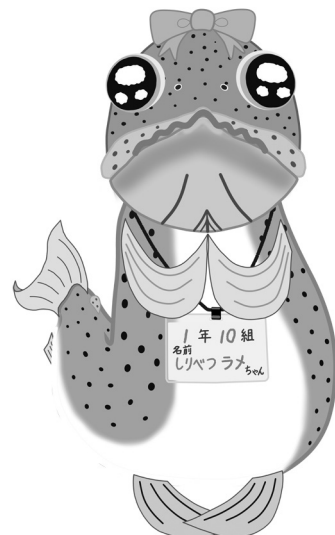
いっぽう「ニセコまち」では、25キロほど離れた高速道路建設現場から残土を引き取って、これまで水田や畑地だった場所に盛り土する工事が進行中でした。当会から事業者側に「近い将来、再導入イトウの遡上が予想される重要な川なので、くれぐれも影響ないように」と伝えました。

イトウからのお願い



釣り師のみなさんに
イトウが釣れたらリリースしよう
繁殖期のイトウ釣りはやめよう
農道・農地に駐車するのはやめよう
川を汚さず、ごみは持ち帰ろう

尻別川流域の開発に関与するすべてのみなさんに
イトウを頂点とする尻別川の自然生態系に、つねに敬意を払ってください
イトウの生存や繁殖を絶対に脅かさないでください
この地域の生物多様性について情報収集してください
オビラメの会と連携して最善策を選んでください



キャラクターデザイン・藤原弘昭

尻別川統一条例（河川環境の保全に関する条例）2005年

（生物多様性の保全）第17条 町（村）は、河川における生物の豊かな多様性を支えるための繁殖環境の保全、啓発活動の推進その他必要な施策に努めるものとする。この場合において、日本最大の淡水魚であるイトウをはじめとする希少な生物に対する保護について特に配慮するものとする。

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

当会は、会費と寄付金などで運営される非営利の市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、「入会希望」と書き添えて、右のゆうちょ銀行口座にお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。オンライン送金窓口もご利用ください。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。おむねひと月以内にニューズレターをお届けします。

- 年会費 2000円
- ゆうちょ銀行
02720-9-11016
- 加入者名「オビラメの会」

オンライン送金窓口



ひごろのご支援に深く感謝いたします

(株)瀧澤電気工事(北海道苫小牧市) patagonia®

オビラメの会ニューズレター 第57号(2022年11月発行)

OBIRAME Newsletter No.57 November 2022

- 発行 ■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
会長/吉岡俊彦 事務局長/川村洋司
- 編集 ■ 平田剛士
- 印刷 ■ (株)須田製版(北海道滝川市栄町3-5-16)
- 口座 ■ ゆうちょ銀行 02720-9-11016 オビラメの会
- 事務局 ■ 北海道虻田郡ニセコ町ニセコ315-198(川村方)
〒048-1511 TEL 090-8279-8605
<http://obirame.sakura.ne.jp/index.html>
©2001-2022 Obirame Restoration Group

水と空気、みどりの大自然

ニセコが好きだ

楽しんだあとは川を語ろう

まぐる屋十割

ニセコ町富士見 65 TEL/FAX 0136-44-2472

Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp